

9 お母さん、ごめんね

語り手：^{かきもと}垣本 ^{くみこ}久美子／聞き書き：資料収集調査員 ^{ゆやま}湯山 ^{えいこ}英子

垣本久美子の略歴

昭和 18(1943)年 9月	^{きつりん} 吉林省 ^{じょらん} 舒蘭県 ^{すいきよくりゅう} 水曲柳 開拓団 <small>【用紙集→満蒙開拓団】</small> で生まれる
昭和 20(1945)年	養父母のところに預けられる
昭和 47(1972)年	結婚
昭和 48(1973)年	長女誕生
昭和 50(1975)年 12月	一時帰国 <small>【用紙集→】</small>
昭和 53(1978)年	二女誕生
昭和 54(1979)年 4月	永住帰国 <small>【用紙集→】</small>
昭和 64(1989)年夏	中国訪問
平成 10(1998)年夏	中国訪問
	12月 夫死亡
平成 21(2009)年	2月に母死亡。3月に兄死亡
現在	^{さっぽろ} 札幌市在住

1. はじめに

久美子の母は24歳で彼女を産み、2歳のときに中国の養父母へあずけた。日本に

永住帰国してから母に「どうして捨てたのか」と問い詰めてもいつも「仕方なかったから」という答えしか返ってこない。今年（2009年2月）、その母が亡くなった。

中国での生活、日本での生活をどういった思いで生きてきたのか、この聞き書きを通してたどってみたいと思う。

2. 渡満まで

喫茶店をたたんで満洲へ

冒頭でも少々触れたが、久美子の母親は満洲でのことを語りたがらなかった。一緒に渡満し、母と共に引き揚げ^{【用語集→】}た長兄に聞いたことから推測するしかなかった。

久美子の母には姉がおり、その姉が亡くなったため後妻として義兄のところへ嫁いだ。後妻先で2人の男の子の母親となり、甥たちの母親になったことになる（もう一人兄がいたが再婚時点では亡くなっていた）。久美子が生まれる前、この夫婦に子どもが2人産まれている。男の子2人で、満洲には前妻の2人の子と共に6人で渡っている。

渡満前、彼らは北海道北見市^{きたみ}で喫茶店を経営していたが、店をたたんで馬を買い、満洲に渡ったらしい。昭和15、6年の頃だという。久美子は、昭和18（1943）年に吉林省舒蘭県に生まれる。4人の兄のうち下の2人は満洲で亡くなっている。いつ頃なのかは分からない。

お兄ちゃんの話で、向こうの水が合わないので、体弱くて死んだ。おまえの上にお兄ちゃん
いるよって聞いた。

母親が引き揚げたときは、前妻（姉）の子ども2人を連れて帰った。下の兄は今年
3月に、上の兄は平成15（2003）年に71歳で亡くなっている。久美子の言う「お兄
ちゃん」は今年3月に亡くなった兄を指す。両親が満洲に渡ったいきさつについては、
この兄からの情報でしか知らない。

お兄ちゃんに聞いたら、なんで満洲に行かなければならないのって。国の政策で。お兄ちゃ
んも分らないから。中国へ行け、行けって。日本は狭いでしょ。行きなさい、行きなさいっ
て。そのとき、うちのお父さんたちは喫茶店を経営していて、たたんでそれで馬を買って。
兄さんは2年かな、3年かな。（昭和）16年か15年に行っているから。北見から。

満洲では中国人を雇って畑を耕していたらしい。久美子の兄もまた満洲のことを多
くは語らなかつた。

3. 養父母に預けられる

逃げ出した兄

久美子と上の兄とは11歳違い、下の兄とは8歳離れている。下の兄も中国人にあ

ずけられているが、逃げ出して母の元に戻っている。父親は召集され敗戦とともにシベリアに捕虜として送られたが、途中で逃げ出して開拓団の収容所に戻っている。この間、一時期だが母親は中国人の家に身を寄せていたらしい。父親は戻ったが、後に病気で亡くなり、母親と子どもたちだけが収容所に残された。引き揚げまでの過程で何があったのは分からないが、母親は唐木田^{からきだ}と再婚。唐木田にも子どもがいた。唐木田は、久美子の継父に当たる。しかし、この時のことを久美子は何も知らない。

3人の子どもかかえてお母さん1人なので、それで生活できないので私を中国人に預けたのね。一番上のお兄ちゃんは中国人のところに来たくない。二番目のお兄ちゃんは、あとで逃げて帰ってきた。私、一番小さいから逃げられない、どうにもならないでしょう。自分で覚えてない。2歳だから。

このいきさつを母親が話してくれないので、久美子は兄や周囲の人から断片的にしるか聞いておらず、母親を問い詰めるしかなかった。しかし、母はいつも「仕方なかった」と口をつぐんでしまう。その繰り返しだったようだ。

私、食べ物と交換して私を向こうに置いてきた。違うよ違うよ、お父さんいないからお母さん困るから。

下の兄からの答えだった。それでも下の兄が亡くなる半年ほど前に、家に来て母親のことや満洲でのことを話してくれた。

久美子があずけられた中国人養父は、共産党員で地下活動をしていたようだ。後に

県の裁判官になる。このとき養母となる女性には、子どもが出来ず久美子を養女としたようだ。

最初の養母との別れ

育ての母はすごくきれい好きで、あんまり（子どもが）好きじゃないみたいね。でも自分で産めないからもらったね。私は体、弱かったんで、新しい服着させて、大、小、とくに大に、下痢してズボンのなか汚してしまうからお母さんにたたかれる。お父さんは毎日仕事なのでほとんどいないね。夜帰ってきたらちょっとかわいいかわいいしてくれるね。お父さんとお母さんは、私の記憶のなかでは、あまり仲良くしない夫婦だね。

最初の養母は、後に養父と離婚する。離婚調停のときに裁判官からどちらにつくか問われた。そのとき、久美子は養父を選んだ。

省の裁判官は私に話を聞いた。お父さんとお母さんは今度別れるから、あなたはどっちに行くかい。お父さんの方がいいかい、お母さんの方がいいかかって、私に聞いたんだよね。でも、小さいころお父さんは、夜になってから帰宅してかわいがってくれるというイメージしかないでしょう。世話や洗濯は全部お母さんしてくれるでしょう。子どもはそんなこと考えないでしょう。

裁判官に「お父さんのところがいいわ」「お母さんのところはいかないの」「お母さんはいつも叩くから嫌だ」自分で言った。今でも覚えている。

これは「一つの罪」だという。それが理解できたのは、自分が結婚して子どもを産み、母親になったときにそう思ったようだ。6年間、体の弱かった久美子の面倒をみてくれた養母への気持ちを次のように語る。

お母さん、かわいそうね。一生懸命世話してね。体も悪かったし。2歳のときに来たんだから8歳までね6年間。ちょうど、お母さん必要なときは面倒みたんだよね。申し訳ない、今そう思う。自分で結婚したら、子どもできたからそう思う。そうじゃないと分らない。

たらいまわしにされて

6年間、養母に育てられたとはいえ、その間に親戚や養父の妹や友だちなどに預けられていたことがある。「今は簡単に言っているけど」と前置きして、預けられ先をいくつか話してくれた。一番長く預けられたのは、養父が再婚して新しい養母との間に子どもが出来てからだった。2番目の養母と久美子は14歳違いになる。養父と養母は2人とも働いていたため、産まれた子ども（久美子の弟にあたる）の面倒だけで手がいっぱい。今度は久美子を河北省に住む養父の両親にあずけたのだった。河北省で5年間、その両親に育てられることになった。そのとき小学校に通った。学校に通えたのはこのときだけだった。

養父の両親は、かわいがってくれたが、ずっと不安だったという。

ほんとうは両親の愛情、もらったことない。生活はそんなに貧乏じゃないけど。愛情はない。

あちこちあずけているから。家庭の愛情はない。じいちゃん、ばあちゃんは、かわいいかわいいしてくれたけど。

このとき、孫のようにかわいがってもらった記憶がある。それまで養父と最初の養母との関係があまり良くなく、離婚するに至るまでの不安、あちこちにあずけられたときの不安、常に不安がつきまっていた。このときから「人の顔色を見て生活していた」という。今も不安に駆られるようだ。

次はまた養父の家に戻されることになる。昭和 33（1958）年、養父と 2 番目の養母のいる吉林市に行く。そのときすでに彼らには 4 人の子どもがいた。1 人目は久美子が河北省に行く前に産まれていたが、いない間に 3 人の子ができていた。久美子は、その子らの面倒をみるために呼ばれたのだった。食事、洗濯、掃除をさせられお手伝いさん扱いだった。

学校にも行かせてもらえず、6 年間家の仕事をするようになった。

楽しみは、たまあにお母さんの会社から劇のキップもらってそれだけ。同じ年の人は学校行っているでしょう。友達いない。近所に親しい人いない。

学校にも行かせてもらえないので、友達もいなかった。また、養父、2 番目の養母は背が高く、子どもたちも体格が良かった。食べる量も半端ではなかったようだ。養母が 1 m80cm、3 人の弟は 1 m90cm と背が高く、妹は 163cm はあるという。久美子は 155cm しかないので、誰の目から見ても兄弟姉妹とは思えなかった。それだけに日本人の子ども、よその子だと周囲から見られ、それをいつも意識していたようだった。

三男が一番面倒をみた子で、今でも仲がよい。今は2番目の養父と三男が吉林市で一緒に暮らしている。ほかの弟や妹とはほとんど交流がない。養父は昭和63（1988）年に亡くなっている。



20 歳頃の久美子

4. 中国での生活

紡績工場で働いて

うわさがあったんだね。「あなたは日本人の子どもだから、親はあんたのことを捜している」と聞いた。うわさになったら、お父さんは、急いで仕事探してくれた。日本人の親は彼女を捜しているから、そうずっと家にお手伝いさんみたいのよくないでしょう。

養父は党员で裁判官という公務員。日本人の子どもをお手伝いさん代わりに働かせているというのは世間体が悪く、久美子に紡績工場の仕事を見つけてきた。その紡績工場では昭和39（1964）年から働き始め、日本に永住帰国する直前まで働いていた。仕事は出来上がった布の検査を担当した。本来であれば3交代、朝8時から4時まで、

4時から24時まで、24時から8時までの勤務に振り分けられるが、久美子は昼間だけの勤務だった。当時の久美子は体重が38kgしかなく、重労働はさせられないという、裁判官である養父の面子がそうさせたようだったようだ。勤めるようになって友人もできた。工場には家から通い、給料のほとんどを家に入れていた。

私の家庭環境わかる人、けっこういい友達できた。私、日本人でかわいそう、みんな大事にしてくれたしね。みんな知っていた。かくしていないけど。見たら、あの家の人間じゃないからわかる。

文化大革命【用語集→】のときはみんな遠慮されたこともあるしね。友達は、心は（私のことを）思っているけども、やっぱり顔では仲良くできない。

友人は、好きなトウモロコシを直接渡すことができず、「あそこにトウモロコシ置いてあるよ」と教えてくれたこともあった。所定の場所に箱を置き、そこでいろいろな物をやり取りしていた。このように文化大革命のときでも理解してくれる友人が職場にはいた。

家を出て寮暮らし

ある夜、工場が停電して2交代目の仕事に入るときに工場が休みになった。そのとき家に帰らず、友人宅に泊まったことが養父母にばれてしまった。「なぜ家に帰らないのか」と叱られ、「帰りたくないから」と答えると、養父母から「今まで育てたお

金を返して」と言われた。「6年間、家のお手伝いをさせられて一銭もお給料もらっていない」と反論し、それを機に家を出て工場の寮暮らしが始まった。ちょうど党幹部とうかんの下放ぶかほうがあったときで、養父母が農村に行くというタイミングもあって、家を出られたようだった。

しかし家を出ても、三男の弟が家からいろいろなものを届けてくれた。養父母も農村から戻り、そうしたことを知るようになって、仲直りが出来たという。

弟がなんでも持って来るから、あとでお父さん、お母さんにばれちゃたんだよね。それで仲良く戻ったんだよね。往来して、弟のおかげだよね。後で考えるといいことも悪いこともあるけど、やっぱり、お父さんは確かに手、叩いたけど、お金をかけたんだよね。前のお母さんは面倒みただけ。お父さんのおかげだね。じいちゃんもばあちゃんもよくしてくれたから。お父さんのお母さんだから、やっぱり感謝しないとね。自然に仲良くした、こうなったのね。

後になって、もし自分が逆の立場だったらと考えるようになった。他人の子どもの面倒をみる事が出来るか、自分の子どもより大切に出来るか、自問自答することがあるという。

結婚へ

工場に勤める友人から劇団に勤める男性を紹介された。1年間ほどお付き合いをして昭和 47 (1972) 年に結婚した。彼の上司から久美子が日本人だからと反対されたが、彼の家は資本家ということで共産党きやうさんとうからは迫害された人間だった。文化大革命

の中だったからそうした絆が出来たのだろう。



夫の劇慶虎と
(結婚当初)

日本人だから、日本人の嫁さんもらいたいへんだから。ちょうど友達で紹介で。彼が資本家の子どもだから、出身がよくないから。共産党から見ればね。国民党こくみんとうから見ればいい家庭なんだけどね。共産党から見れば悪い家庭だね。悪い家庭なので、2人とも悪い家庭思われて、私も日本人だからね、それで一緒になった。うんうん、あまり良くない人間だからね。共産党にとってね。彼の会社の上司は、あまり日本人の人をもらわないほうがいいんじゃないの、将来、たいへんよって言われたのね。でも彼はいいよって。そういうことになったの。

5. 永住帰国して

日本からの手紙

養父母の元に日本の母から手紙が届いていた。しかし、養父母は全部公安局【用語集→】

に届け、久美子には渡さなかった。下放^{【用語集→】}から戻った養父母と仲直りしてから、彼らが覚えている住所を紙に書いてもらい、近くの残留婦人に頼んで日本宛の手紙を書いてもらった。そこから日本に住む母と再婚相手の唐木田との文通が始まり、里帰り^{【用語集→】}が実現した。

唐木田のお父さんとお母さんに手引きしてもらって。それで里帰りしたね。1回中国に戻って、毛沢東^{もうたくとう}が亡くなったときに北京にいたから。そのとき帰ったの、中国に戻って。東京、上海^{しやん}、北京^{はい}まで飛行機ね。そのとき毛沢東死んだの。お母さんと再会、お父さんは初めてだ。再会してもお母さんの顔もわからない。2歳だからね。ぜんぜん覚えてない。ただ、納豆だけ覚えている。昔食べた納豆、草に入っているでしょう。これなんとなく覚えている。

毛沢東が亡くなったのは昭和 51 (1976) 年 9 月 9 日。日本に里帰りしたのは昭和 50 (1975) 年の 11 月だった。吉林市^{きつりん}に戻る途中の北京で毛沢東の死を知る。札幌には 10 カ月滞在したことになる。中国では里帰りの申請を夫婦でしたが、夫の許可が下りず、2歳半になる娘と一緒に母の住む札幌市に滞在したのだった。母と唐木田と話をするのは、言葉が分からず筆談だった。



4歳になった長女と（中国の家で）

中国に戻った久美子は、夫と相談して日本に永住帰国することにした。もし、文化大革命がもう1回起こったら、生命の危機を感じたという。

貧乏でもいいから、日本に行くかいと決めたのね。危ないから。そこにいたら将来はどうなっているか分からないから。生活はぜんぜん考えていないから。ただ政治から自由になりたいのね。今、考えると政治の差は、生活の格差よりも精神的に参ってしまうから。

夫婦で決心して、昭和54(1979)年4月に永住帰国した。それまでの手続きに関しては、一切誰にも伝えなかったという。許可が下りない場合、うわさだけが広がると心配したからだった。夫の家族や親戚、久美子の養父母や仲の良い弟にも言わないで申請した。

許可が下り、帰国1カ月前になってようやく皆に話した。どうして話してくれなかったのかと怒られたが、後になって事情を説明すると理解してくれた。希望を持って帰国したものの、今度は言葉の壁、仕事の壁に悩まされるのだった。

ゴルフ場で働いて

母の再婚相手の唐木田が保証人【用職集→身元保証人】となり、夫婦2人と娘2人の永住帰国が実現した。里帰りしたときは娘1人だったが、もう1人娘が産まれていた。家族4人は唐木田の家に身を寄せ、1カ月後には近くのゴルフ場で働き始める。下の子は産まれてまだ半年ほどだった。

でもさ、実のお父さんじゃないから、いくら保証してもらっても座って食べるわけにはいかないでしょう。1カ月たってからゴルフ場で働いた。

保証人になってくれた継父には、経済的な面まで迷惑をかけたくないという遠慮があり、言葉が話せないまま仕事に就いたのだった。仕事は、ゴルフ場の芝刈りだった。

朝、おはようしか使わないし、晩はさよなら、2つ言葉。勉強にもならないから。旦那さんあせっていたわ。

最初は札幌のにっちゅうゆうこうきょうかい日中友好協会で日本語を習っていたが、それも週1回だけだった。2人は働きながら言葉を覚えようとしたが、職場では同僚とほとんど言葉を交わすことはなかった。上の娘も言葉が分からないまま小学校に入学させた。学校でどんなふうに勉強をしていたのか、久美子夫婦も自分たちの仕事や生活に精一杯だった。大きくなってから聞いた話によると、隣席の子どもが出している本を見て、それを真似して出していたようだった。

子ども、泣かないで毎日行っているけど、どうなっているか分からないから。大きくなっていろいろ聞いたら、人の本を見て本を出していた。親は生活のことで精一杯だから、彼女の面倒みてあげられないもの。学校へ何を持って行ったのも分からないよ。連絡帳も見れないから。中国はのんびりしているから。そんなのよくわからない。

ゴルフ場で働き始めて「2人の考えが甘かった」と感じていた。けっきょく、ゴル

フ場の仕事は辞めた。当時使っていた草刈機が重たく、腰を痛めたからだった。一時期、生活保護を受け、その間に夫は自動車運転免許を取得した。これは、珍しいということで当時の新聞にも載ったらしい。その新聞記事を見た中古車販売会社の社長が、夫を雇い入れてくれたのだった。しかし、その社長が考えていた中国への中古車販売は思ったようには進まず、そこを辞め、今度は兄の世話で別の中古車販売会社に勤めることになった。

夫は中国では、国营の劇団に勤め、舞台の設計などを担当していた。中古車販売の営業という職はなかなか馴染めないものだったようだ。

次に始めた仕事は、餃子を出す「中国飯店」という食堂の経営だった。札幌の北4条西12丁目に知り合いの中国からの引揚者とともに開いた。中国の残留孤児、引揚者の初のお店として新聞やテレビで取り上げられたのでお客は入ったという。テレビで宣伝してもらってもっていたようだと言いつつ振り返る。

実は久美子と夫は、それほど料理が得意ではなかった。餃子とお菓子の^{マホア}麻花なら何とか作れるだろうということで始めたのだった。7年ほど営業を続け、親子で生活するくらいの収入にはなっていた。しかし、2人は体を痛めてしまった。

餃子作るの時間がかかるの。今でも両方の親指、背中も痛い。餃子作るのにギョウザ病気だね。7年くらいだね。食べるくらいはできたけど、もうからないわね。そのとき痛めた足が（今も）痛いし。

のちに店を閉め、家の隣に小さな作業場を作り、そこで餃子を作って卸餃子販売に切り替えた。夫は家で油絵を描き、それをときどき売っていた。中国では舞台の絵も

手がけていたのだった。しかし、そう売れるものではなかった。

中国から一緒に永住帰国した夫も、平成 10（1998）年 12 月に病気で亡くなってしまった。久美子と 5 歳違い、60 歳だった。

もし夫が生きていたら、中国へ戻るという別の考えもあったかもしれないという。しかし、2 人の娘のことを考えると実現したかどうかは分からない。養母や仲のいい弟を訪ねて遊びには行きたいと思うが、久美子にとって娘 2 人を日本に残し家族が離れて暮らすのは、とても辛いことである。

実は、上の娘を産んだときに喘息が出て、小さいこの子を残して死んでしまったらと考えただけで恐かったという経験がある。自分と同じ運命をただらせてはならないという思いが強い。

私死んだら恐かった。病気かかえて、自分が死んだら恐かった。どうしようどうしようってすごく恐かった。いなくなったら子どもかわいそうではない。

6. 別れ

兄と母の死

今年（2009 年）2 月に長い間、寝たきりだった母が施設で亡くなった。そして何かと面倒をみてくれた兄も今年 3 月に亡くなった。兄が亡くなる前年の秋にひょっこり家に来て、満洲での話、母の話をしてくれたばかりだった。兄もまた満洲での話はあまり語ったことがない。そのとき、母の置かれた事情について話してくれたのだっ

た。

それまで母に対しては、「なぜ捨てたのか」と問い詰めることがあっても、「仕方ないから」という返答だけで、何も話してはもらえなかった。兄の説明で、前よりは事情を理解できるようになっていた。

おかあさん、ごめんねって。

母の臨終の顔を見るなり、この言葉が自然に出たという。

ごめんなさいと言った。ずっと許してなかった。なんで私、中国人に預けたか。

ずっと心に棘（とげ）のように残っていた気持ちが、「ごめんね」と許すことが出来たという。



聞き書きを終えて

垣本久美子さんへのインタビューは3回（2007年9月8日、2009年4月11日、同年5月5日で3回目は原稿チェックと補足説明）行いました。今年に入ってから相次いでお兄さん、お母さんが亡くなり、体調が優れないようでしたが、2回目の聞き取りを引き受けてくださいました。

昨年から中国帰国者支援・交流センター【用紙集→】で日本語の勉強をしているそうです。「先生は一生懸命教えてくれるのに、なかなか覚えられず申し訳ないです」と言っていました。

垣本さんへの聞き取りは、中国帰国者自立研修センター【用紙集→】（当時）の向後洋一郎^{こうご よういちろう}氏からの紹介でした。1回目のときは、札幌市中央区にある華僑会館^{かきょうかいかん}にボランティアとして週何日か通っているときでした。その合間にお宅におじゃまさせていただいて聞き取りをしました。それから間が空き、不幸が続いた直後の聞き取りとなってしまいました。辛いときに話してくださって本当にありがとうございました。

お母さんご本人は満洲でのことを何も語らずに亡くなっています。語りたくなかったのでしょう。閉ざされた心のままで、久美子さん自身も母親に対する行き場のない思いを重ねて来ました。久美子さんの希望で、お兄さんから聞いた母親の終戦直後の事情については、書かないでほしいということで記載していません。

お母さんが亡くなったときに出た言葉が「ごめんね」でした。「『何がごめんなの』とお母さんはきつと言うと思う」と涙ながらに語っていました。ここ数年、久美子さんの心の内をお聞きしながら、何度も辛くなることがありました。聞き取りを終えて原稿としてまとめるのに長い時間を要しました。今も、久美子さんの心に少しでも寄り添えることができたのだろうか、自分自身に問うています。（ゆやま えいこ）

基本データ

聞き取り日：2007年9月8日、2009年4月11日、2009年5月5日

聞き取り場所：垣本久美子さんのご自宅

初稿執筆日：2009年5月6日